

〈授業報告〉

スポーツとSDGs

—スポーツ社会学での学び—

出口順子*

1. はじめに

スポーツ社会学の授業の到達目標は、以下の3点である。第1に、スポーツ社会学のフレームワークを説明できるようになること。第2にスポーツを様々な社会的事象と関連して考えることができること。第3に現代社会におけるスポーツの意義について自分なりの考えを持ち、主張できること。これらの到達目標を達成するために、スポーツの本質、利用されるスポーツ、スポーツ政策、多様なスポーツ関与の側面から授業を展開している。具体的な授業内容を表1に示す。スポーツの本質では、スポーツの文化的な価値に着目し、スポーツの本質は「遊び」である点を強調している。ここではスポーツそのものの価値について考えている。利用されるスポーツでは、スポーツが良い意味でも悪い意味でも社会において利用されていること、スポーツと社会の関わりにおいてスポーツが政治的に利用されず、中立的なものであることの困難さについて学修している。スポーツ政策では、これまでの日本におけるスポーツ振興施策やスポーツ推進体制について学修し、現代的に着目されるスポーツ政策と振興のあり方を考えることとしている。最後に多様なスポーツ関与では、「する」「みる」「支える」側面でスポーツを考え、例えば総合型地域スポーツクラブの現状や、スポーツとジェンダーの問題、スポーツと環境問題について考えている。

第14講では、ジェンダーとスポーツについて考える内容であるが、今年度は持続可能な開発目標（以下「SDGs」と略す。）の視点を交え、ジェンダーとスポーツについて考えた。第14講では、ジェンダーとは何かから始まり、性の多様性尊重として、スポーツが性別二元論を可視化しているという問題、性別確認検査、トランスジェンダーの選手の大会参加の現状を話した。また指導者として知っておくべき事柄として、スポーツ基本法（2011）、スポーツ指導者のための倫理ガイドライン（日本スポーツ協会、2013）、IOCオリンピック憲章（2014）の記述についても紹介した。またSDGsでは目標5として、「ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る」が掲げられており、スポーツとの関連では「スポーツを中心とする取り組みやプログラムが、女性と女児に社会進出を可能にする知識やスキルを身に付けさせる潜在的可能性を備えている場合、ジェンダーの平等と、その実現に向けた規範や意識の変革は、スポーツとの関連で進めることもできます」とされている（国際連合広報センター、2016）¹⁾ ことについても言及した。さらにSDGsにおけるジェンダーとスポーツとの関係だけではなく、SDGsとスポーツについても事例を紹介し、スポーツが貢献できることについても考えた。

本稿ではスポーツ社会学の学びについて、特に第14講でのSDGsとスポーツにおける学生の学びについて報告する。具体的には期末テストにおいて設定した記述式の設問についての記述を紹介することで、学生が学び得たことについて報告したい。

* 東海学園大学スポーツ健康科学部准教授

表1. 授業内容

回数	講義内容	講義概要
第1回	ガイダンス（スポーツ社会学とは）	スポーツの本質
第2回	概論スポーツ社会学	〃
第3回	スポーツの語源と歴史	〃
第4回	現代社会におけるスポーツの意義①：文化	〃
第5回	ナショナリズムとスポーツ	利用されるスポーツ
第6回	日本のスポーツ：企業スポーツ	〃
第7回	商業主義とスポーツ／メディアとスポーツ	〃
第8回	現代社会におけるスポーツの意義②：問題	スポーツ政策
第9回	スポーツ関連法および計画	〃
第10回	ノーマライゼーションとスポーツ：障がい者スポーツ	〃
第11回	文化としてのスポーツ①：現代社会	多様なスポーツ関与
第12回	文化としてのスポーツ②：社会的事象	〃
第13回	地域とスポーツ：総合型地域スポーツクラブ	〃
第14回	ジェンダーとスポーツ	〃
第15回	環境問題とスポーツ	〃

2. 履修者

スポーツ社会学は、2年次春学期配当の科目である。卒業および資格との関連では、卒業のための選択必修科目であり、教職課程科目（教科に関する科目／選択必修）である。また（公財）日本スポーツ協会スポーツリーダー／コーチングアシスタントの資格取得関連科目でもある。よって履修人数が多くなることから、学籍番号によってAクラスとBクラスに分かれている。2022年度の履修者はAクラス、Bクラス共に112名であった。

3. 学生の学び

期末試験では、基本的な知識を問う択一式の問題35問と、学びを踏まえて自身の考えを述べる記述問題1問を出題した。記述問題は、スポーツがSDGsに貢献できる事柄について問うものであった。ここではこの問いに対する回答について、SDGsの目標毎に代表的なものを紹介する。

目標5のジェンダーとスポーツについては以下のような記述があった。

スポーツがSDGsに貢献できることは、女性・女兒でも参加しやすいスポーツイベントの企画をすることだと思ふ。女性はスポーツが得意ではない人もいると思ふけれど、遊びの側面が強い活動を企画することができれば、女性にも参加してもらえるようになり、ジェンダー平等の達成に近づけると思ふ。

またジェンダー問題を克服するツールとしてのスポーツを挙げたものもいた。

スポーツは明確に男女を分けて行うものが多いが、基準を設ければ男性の種目に女性が参加することもでき、社会全体に大きな影響を与えられると考える。東京2020オリンピック・パラリンピックでは、女性の選手が男性として出場し、大きな話題となったのはその良い例であり、広くジェンダーの問題について考えるきっかけになった。

自分が望む性での競技の参加が普通にできるスポーツ界を作っていくことが、スポーツがSDGsに貢献できる1つの案であると思ふ。

スポーツは「男らしく」や「強く」が印象に残ってしまう。女子のプロ野球チームもあっても良いのではないか。読売ジャイアンツは女子チームを発表したが、他のチームにはまだない。このようにスポーツは「男」の認識を変えるために、スポーツができることはまだ残っていると思う。賞金額も平等にするべきである。スポーツ上でのジェンダーの不平等がなくなれば、世の中は少し変わると思う。

このようにスポーツ参加自体に男女の平等が担保されること、またそれによりスポーツ以外の場面におけるジェンダー平等が達成されるとの記述がみられた。しかしながら世界ではスポーツ参加自体が難しい国やLGBTQ等の問題に積極的でない国も存在するという視点が抜けているように感じた。来年度の授業ではこの点も踏まえ、身近なところで考えるだけでなく、もう少し広い視野で物事を考えることができるように資料を準備したいと思う。

目標1である貧困（あらゆる場所あらゆる形態の貧困を終わらせる）については以下のような記述があった。この記述は「誰1人取り残さない」ことにもつながると考えられる。

貧困でスポーツができない人でも参加できる場所を作る。場所は広い公園や学校の体育館を利用する。学校で行う場合は用具を貸してもらう。場所の利用料を抑えることで主催者の負担を減らす。そうすることで多くのスポーツを経験できる。

どれだけ貧富の差があっても、この世界に生きる全員にスポーツをする権利、楽しむ権利があると思う。またスポーツにより水や食料が必要な国がスポーツにより多くの人に知られることとなると思いました。

貧困は水や食料が足りない国の問題だけではなく、実は日本でも起こっている問題でもあり、経済的な理由でスポーツにアクセスすることが難しい人もいるという授業の内容を踏まえた内容の記述もみられた。社会問題を解決するツールとしてのスポーツの事例を来年度の授業では紹介したい。

目標3のあらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進するについて、以下のような記述があった。

スポーツをすることによって人は健康状態を保つことができると考える。

スポーツを行うことで身体的な健康だけでなく、精神的な健康にも影響があると思うので、福祉という点においても貢献できると思う。もちろん運動を行えば健康維持に役立つので国民全員が少しでも運動をすれば、SDGsに貢献できると考えた。

スポーツと健康については他の授業でも扱っており、比較的考え易かったように思う。しかしながら記述はスポーツ科学の知見に基づいているものというよりは、一般的に考えられる事柄であり、他の授業と本授業を有機的に結び付けて考えられるような授業展開が必要だと感じた。

目標10の国内および国家間の不平等を是正するに関して、以下のような記述がみられた。

私はオリンピックの大会で難民ももっと参加できる大会であればSDGsに貢献できると考える。大会ではたくさんの費用がいるが、難民の人は参加する費用がないため、参加できないことも考えられる。国同士が助け合って、どんな国でもどんな人でも大会に参加し、スポーツを平等にできるようになればいいと思う。

スポーツにおいても誰一人取り残さないという視点が示されていると思う。自分事として問題を捉え、どのような解決策が考えられるのかまで考えられるような授業展開が必要だと感じた。

特にどの目標に対応しているとは言えないものの、スポーツが持つ価値を活かすことで、SDGsに多面的に貢献できると考えた記述もみられた。

チャリティ大会を開催することで、貧困に苦しんでいる人々に援助することができる。またチームのオフィシャルグッズ等の利益の何割かを寄付金に充てることで教育が不足している地域に寄付を行うこともできる。選手と共にスポーツをすることで、保健や教育の社会問題の解決に貢献することができる。

スポーツにはたくさんのお金が集まるので、そのお金を世界の貧困で困っている人に寄付をしたり、学校などの施設を立てることもSDGsに貢献できることだと思います。

スポーツは貧困に関係なく行えるものであり、誰もが平等に楽しむことができる。教育は中学までは義務教育で、体育の授業で全員が同じスポーツを学習できる。ジェンダー平等とその実現に向けた取り組みはスポーツとの関連で進めることができ、実際2020東京オリンピックでは男性の協議に女性が出場したり、男女のチームで競う競技もあった。スポーツが持つ力は平和へとつながり、SDGsへの貢献ができるものは沢山あると思う。

スポーツがSDGsに貢献することはスポーツの価値を高めることであるという点について強調し、そのためにどのようなことができるのかについてグループワーク等を用いて考えるという授業展開も有意義なように思う。

スポーツを利用した具体的な取組みについて考えた学生もみられた。

スポーツの観客にごみの分別をしてもらうことで地球環境に貢献することができる。またペットボトルのふたを例えばプロ野球の試合で回収すれば多くのふたを集めることができ、ワクチン等への交換を通して他国への支援につながる。

スポーツをする場所に発電できる設備を組み込めば、発電しながらスポーツを楽しむことができると思う。

事例や考えを共有することで新たなアイデアが生まれ、実践につながっていくと感じた。

4. 今後の授業に向けて

本稿では、スポーツ社会学の学びについて、特に第14講でのSDGsとスポーツにおける学生の学びについて報告した。ジェンダーとスポーツを扱っている授業でもあったため、ジェンダー平等について考えた意見が多くみられた。そしてその多くがスポーツ内でのジェンダー平等の実現についてであった。しかしながらスポーツとSDGsを考える際にはスポーツそのものがSDGsにどう貢献するかという視点と、スポーツを通じてSDGsにどう貢献するかという視点が必要である。国際連合が挙げているのはスポーツを通じてという視点であり、そのような視点を持つためには世界的なジェンダー平等の現状に思いを馳せる必要がある。1時間の授業では扱える内容に限りはあるが、そうした状況も紹介しながら、今後はスポーツを通じたジェンダー平等の実現を考えられるような事例を紹介していきたい。

また、自分事として捉え、具体的に何ができるのかまで言及されたものはほとんどみられなかった。表面的な事柄だけでなく、自分では何ができるのかを考えるような授業にしていきたい。そのためには

他の人の意見を聞いたり、事例を調べたりするのが有効なように思われる。学生の主体的な学びを促していきたい。

参考文献

- 1) 国際連合広報センター (2016) スポーツと持続可能な開発 (SDGs). https://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/18389/. (2022年10月19日最終アクセス)